

## 丸の内中学のビオトープ移転をパートナーシップで成功させよう!

名古屋市立丸の内中学校 × 株式会社テクノ中部

### 取組概要

名古屋市立丸の内中学校のビオトープが体育館改良工事のため廃止の危機を迎えた。SDGs AICHI EXPOの会場で同校の教職員からの相談を受けた当社（テクノ中部）は、SDGs パートナーシップ協定締結企業2社（文吾林造園×五大エージェンシー）と連携し、同校の教職員・生徒と協働することで、ビオトープの移設を実現した。



ビオトープ池の移設



一本松の植樹

### 基本情報

代表地方公共団体	名古屋市立丸の内中学校
代表民間団体	株式会社テクノ中部
他の連携団体等	中部文吾林造園（株）、（株）五大エージェンシー
カテゴリ	環境保全対策／都市景観整備／教育施設整備
事業費	
めざすSDGsゴール	
事業化までの期間	1か月

### 取組内容



植物の移植作業



畑の造成

この取組で解決した課題	名古屋市立丸の内中学校には、体育館の裏側にビオトープが設置されていたが、老朽化が進むとともに、体育館改良工事のため同ビオトープを廃止する必要が生じ、これを利用した環境教育が実施できなくなることから、その移設が必要となった。SDGs AICHI EXPO 2021に出展していた当社は、同じく同EXPOに出展していた同校教諭から、ビオトープの正門横への移設について相談を受けた。また、同校は東日本大震災で甚大な被害を受けた陸前高田市と交流しており、同市を訪問した生徒からの提案により、東日本大震災を忘れないために、同市の「奇跡の一本松」にちなんで一本松を、移設先のビオトープの近くに植樹したいとの希望もいただいた。
解決に向けた手法	当社には、ビオトープの設計・管理、教育活用のノウハウはあるが、施工技術がないため、当社が進めている「SDGs パートナーシップ協定」の締結先で、ビオトープの造営ノウハウを有する文吾林造園（株）（飯田市）と土木工事の技術を有する（株）五大エージェンシー（名古屋市）の協力を得ることとした。丸の内中学校と企業3社で事前協議の上、移設計画を策定し、移設工事は同行の教職員・生徒、企業3社の社員が協働することで、約1カ月の期間で完工させ、以降、同校の教職員・生徒でビオトープの生態系形成に取り組んだ。なお、移設にあたっては、旧ビオトープの石材、泥、植物を最大限有効活用するとともに、新たに造成した隣接する畑には、ビオトープへ昆虫を呼び込むための野菜等を植えた。また、「一本松」については、当社の事業場がある名古屋市内の火力発電所に自生している松の苗を譲り受け、これを植樹した。

## 取組詳細

事業推進上の各団体の役割分担	当社（テクノ中部）がビオトープの移設計画策定および一本松の苗の手配を担当し、移設にあたっての重機、工具の手配および操作は五大エージェンシーが担当、移設先の樹木の根の処理および一本松の植樹は文吾林造園が担当した。旧ビオトープの解体、再利用資材の回収・運搬、新ビオトープの造成は、教職員・生徒、企業3社の従業員が協働して行った。
地域関係者との連携方法	同校は中日新聞本社の目の前にあり、陸前高田市との交流行事には同社も関与していることから、本事業について社会へ向けて発信するため、同新聞社の取材を受け、記事にしていた。
資金調達方法	資金調達なし（重機、工具、機材は中学校と企業3社が保有するものを活用し、ビオトープの造成に必要な資材のほとんどは、旧ビオトープおよびその周辺のを再利用することで、資金調達ゼロで移設を完工した）
資金調達方法の補足	
事業推進上の課題・工夫	本事業については、同校体育館の改良工事の時期が確定しており、それまでに予算措置ができないものと考えられたことから、連携、協力する企業のリソースを有効活用するとともに、旧ビオトープの構成部材を再利用することで、必要最小限の費用で完工する必要がある。そこで、当社が進めているSDGs パートナーシップ協定の枠組みを活用し、本事業を資金調達ゼロで完工できるよう、文吾林造園と五大エージェンシーに協力を要請するとともに、人的資源は同校の教職員と生徒、企業3社の社員で確保することで、事業を完結することができた。

## 担当者のコメント

## 優良事例応募項目

取組のポイント（3つの視点）	<p>①地方創生SDGsの視点</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・同校の立地は「地方」ではなく「都会」だが、近隣（学区内）居住者の減少に伴い、同校は名古屋市内で生徒数が最も少ない点で、「都会の中の地方」と言える。このような事情のなかで、同校の教職員および生徒たちと協働でビオトープを移設できたことには大きな意義がある。</li><li>・ビオトープの移設にあたっては、旧ビオトープの石材、泥、植物を最大限に再利用することで、旧ビオトープで形成されていた生物多様性を保存するとともに、廃棄物を削減することができた。</li></ul> <p>②ステークホルダーとの連携</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・ビオトープ造営ノウハウを有する文吾林造園(株)および土木工事の技術を有する(株)五大エージェンシーと協力することで、ビオトープの移設を円滑に進めることができた。</li><li>・移設先は同校の正門横であり、同校を訪問する父兄をはじめとする関係者が、容易にビオトープを見学することができ、生物多様性について理解を深めるうえでの一助となっている。</li></ul> <p>③モデル性・波及性</p> <ul style="list-style-type: none"><li>・小中学校のビオトープは、その老朽化や荒廃により、生物多様性教育に適切に活用されていないケースが多いことから、今回の事業スキームを参考に、最小限の費用でビオトープの再生が可能になるものと考えられる。</li></ul>
----------------	--